

岡山理科大(岡山市北区理大町)がモンゴル科学アカデミーとゴビ砂漠で進める恐竜の共同調査が今夏、2年目を迎えた。同大の教員、学生9人は8月12日から、ゴビ砂漠の東部と南東部を調査、今月3日帰国した。モンゴルでの恐竜調査は、旧林原自然

科学博物館(岡山市)が1993年に着手。2013年に同大へ研究事業が移管されたのに伴い、昨年再始動した。同博物館の一員として調査に参加し、昨年からは同大教授として後進の育成に努める石垣忍さん(61)に、ゴビ恐竜調査の「今」を寄稿してもらった。

① 平和だからできる



発掘のため共に闘う

1939年の春から夏、モンゴルと日本は交戦した。場所はモンゴルの東端。日本が支配していた旧満州(現中国東北部)との国境紛争である。日本ではノモンハン事件、モンゴルではハルハ河戦争と呼ぶ。特に8月は大規模な戦闘があった。全期間ではソ連・モンゴル合同軍と日本軍合わせて2万人近い戦死者を出している。それから77年後の今年8月。私を含む岡山理科大の教員と学生は、モンゴルの南部でモンゴルの研究者と

一緒に恐竜化石探査と地質調査を行った。

風が静かで空が澄み渡ったある夜。あまりにも静かなのでかえって眠れなくなった私は寝袋を外に持ちだし、空を眺めながら寝ることにした。星々と優しい光を投げかける月、そして時々流れるペルセウス座流星群の流星を見ながら、ふとノモンハン事件を思ったのである。77年前、戦場の兵隊の上にも同じような夜空があったはずである。両軍の兵隊たちはどのような気持ちで夜空を眺めたのだろう。兵士たちの気持ちに思い巡らした時、改めてしみじみと感じ入った。「平和だからできる」

勢ぞろいした岡山理科大「モンゴル共同調査隊。さて誰が日本人? 誰がモンゴル人? (筆者は前列左から2人目)

8月19日、バイシンツァフ

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍



いしがき・しのぶ

1954年和歌山県生まれ。東京教育大(現筑波大)卒。理学博士。92年に林原自然科学博物館準備室に入り、同館長を務めた。2015年4月から岡山理科大教授。専門は恐竜の生態学。

和だからモンゴルの人々と一緒にこの地で恐竜発掘ができるのだ」と。酷暑、砂嵐や雨、害虫。ゴビ砂漠の野営生活の苦労は77年前も今も変わらないだろう。しかし、私たちはモンゴルの研究者と協力して恐竜化石発掘という共通目的のために闘っている。明日の命も知れず敵と戦っているわけではない。幸せなことだ。平和でなければ恐竜の発掘などできるわけがない。

昨年から本格的に始まったモンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所との共同調査に今年は総勢18人が参加した。岡山理科大から教員6人、学生3人、モンゴル側は研究者が6人。運転手とコックさんが隊を側面から支えてくれた。林原「モンゴル共同調査時代から続く「日蒙一緒に発展する」「同じ釜の飯を食う」というスタイルは堅持されている。

ふと思った。平和でないと恐竜共同調査などできるわけがないと書いたが、実はこうした学術交流も、両国の相互理解を深め、平和に貢献しているのだろうと。

安倍首相はモンゴルを3回も訪問し、日本からモンゴルへの投資も盛んだ。相撲界ではモンゴル力士が大活躍している。政治経済、スポーツの交流に加えて、私たち古生物学者も日蒙の相互理解と平和に資したい。

夜空に流星が流れた。「平和」来年も」と願いをつぶやいた。

随時掲載